司書課程を修了するにあたって

藤原　真以子（文学部文学科日本文学専修）

はじめに

私は 1 年次より司書課程に在籍し、4 年次に図書館実習に参加した。私が世田谷区立中央図書館で実習をさせていただいた 2015 年の 10 月は、公共図書館に関する報道が多くなされた時期だった。報道の内容は 2 つに大別することができる。

ひとつは、海老名市立中央図書館で導入されている指定管理者制度をめぐる図書館経営に関する報道だ[1)]。もうひとつは、出版不況の一因は図書館の新刊貸出にあるといった、図書館の貸出と図書の売上に関する問題だ[2)]。

本稿は、こうした状況下で実習を行った私が、実習ならびに司書課程の教育について、現在考えていることをまとめたものである。まず司書課程の教育について､次に実習について、体験や率直な意見を記していきたい。

1. 司書課程の教育について

大学に入学してすぐに、司書課程の履修ガイダンスに参加した。理由はとても単純で、本を読むことが好きだったからだ｡それまで､図書館や司書の意義について考えたことはなかった。図書館は本を無料で借りられる場所、司書は図書館に居る人という印象しかなかった。司書は本好きというだけではないというような内容のことをガイダンスで聞いたはずだが、その言葉を聞いても図書館や司書についての私のなかでのイメージが大きく変わることはなかった。そのため､「図書館概論」の講義では、図書館の理念や図書館の歴史と、自分の図書館に対するイメージの差に衝撃を受けることも少なくなかった。

すべての講義で学ぶところが多かったが、永田治樹先生の「図書館サービス特論」と「図書館制度・経営論」は特に印象に残っている。

「図書館サービス特論」では、コミュニティにおける「場所」という観点から公共図書館がどのような可能性を持っているのかを検討した。ロバート・パットナム著 *Better Together* の第 2 章 “Branch Libraries” を用いた授業では、図書館が人種や階級の異なる人と人とが信頼を構築する場として機能した例があることを知った。この授業をきっかけに、私は公共図書館がコミュニティにおいてどのような役割を担っているのかという点に関心を持つようになった。

「図書館制度・経営論」では、世界の図書館の利用状況やサービス、経営について学ぶことを通し、日本の図書館を相対化して捉えることができるようになった。特に印象に残っているのは、私を含むグループ数名で世界の図書館経営について発表をした際の永田先生のご指摘だ。私は発表で、業務委託や指定管理を導入していない北欧の図書館サービスが充実していることを紹介した。それに対し、先生は「税金をそれだけ図書館の経営やサービスに費やすことに住民が同意しているから可能なこと。日本の人たちが、今以上に多くの税金を投入してまで、図書館のサービスを向上させたいと思っているかどうかは分からない」という主旨の指摘をくださった。このご指摘は、私にとって、日本では公共図書館にどのような役割が、どれくらいの熱量で期待されているのだろうと考えるきっかけとなった。

以上のような関心や疑問は、司書課程の授業を履修しなければ生まれることがなかった。司書課程での学習は、ただの本好きから履修を始めた私が、図書館を通して現実の問題に目を向けるきっかけとなった。小説の世界やその作品の成立当時の社会にばかり関心を持って

いた私にとって、司書課程での学習は有益なものだった。

履修生の多くは私と同じ文学部に所属しており、何人かに話を聞いてみるとやはり、本が好きという理由で履修を開始したようだ。もちろん、他の学部に所属する学生もいたが、文学部の学生の割合が多いように思う。それ自体が悪いというわけではないが、学生の関心分野に多様性があった方が、授業内の議論を通して学生同士が自分にない視点を得られるだろう。そのためには、1 年次または 2 年次の段階で、より多様な専攻の学生が司書課程に関心を持つような仕組みが必要だ。

具体的に、どのような仕組みを設けるべきかという問いに対し、明確に答えることはできない。だが、司書課程で学ぶことのできる様々なことを広範囲に伝えていくことが有効ではないかと考える。私のように図書館が直面する課題を考えることを通して、地域コミュニティや人とソーシャル・キャピタルといった側面に関心を持つ人もいれば、信頼性の高い情報の収集やレファレンス・クエスチョンに適合する資料の提示といった側面に関心を持つ人、分類・目録、児童サービスに関心を持つ人など様々だろう。多様な専攻の学生が司書課程に興味を持つために、司書課程で学べることの多様性を提示するのはどうだろうか。

また、文学部の学生で、大学での学びを直接生かした職に就きたいと考えている人は、今一度自分の進みたい方向を考えて欲しい。たとえば、文学資料館で働くことを視野に入れているならば、司書ではなく学芸員の資格が必要だ。自分が進みたい方向と必要な資格については、一度確認しておくとよいと思う。

2. 図書館実習について

冒頭で述べた通り、私は 4 年次の 10 月に世田谷区立中央図書館で実習をさせていただいた。全 10 日間で、様々な業務を体験した。実習の詳細については後述することにして、まずはどのようにして実習先を選択したかを説明する。

すでに述べた通り、私はコミュニティにおいて図書館がどのような役割を担っているのか、また今後担う可能性があるのかといった点に関心があったため、実習館種は公共図書館に決めた。なかでも、世田谷区立中央図書館を希望したのは、多くの業務を体験できると先生からうかがったからだ。

私は 4 年次に実習に参加したが、4 年の夏から秋にかけてと言えば、就職活動と日程が重なることが多々ある。私の場合、2 年次に情報サービス演習や情報資源組織演習の履修希望届を出し忘れたので、それらの授業を 3 年次に履修することになった。その結果、実習に参加するならば 4 年次という選択肢しかなかった。4 年での実習は、インターンシップや就職活動を経験していたため比較的緊張せずに事前打ち合わせや実習に臨めたという点では良かった。図書館の経営や貸出のあり方について、メディアでも多く取り上げられている時期に実際に現場を体験することができたのは幸運だったと思う。しかし、一般企業への就職を考えているのならば、3 年での実習参加をすすめる。少なくとも、私のように窓口への履修希望届の出し忘れという理由で選択肢がなくなることは避けてほしい。司書課程を履修している学生には、履修要項と 2 号館横の掲示板をよく確認してほしいと思うと同時に、先生方には掲示板よりも学生が気付きやすい方法でのアナウンスを検討していただきたい。

ここからは、実習の内容について記していく。私は世田谷区立中央図書館で多くの業務を体験させていただいた。児童サービスの一環として絵本の読みきかせをしたり、実際に貸出・返却カウンターやレファレンス・カウンターに立ったりもした。その中でも、自分の力不足を感じたという点で印象に残っている業務が 2 つある。

ひとつは、選書会議だ。自然科学系の図書の選書会議に参加させていただいたのだが、職

員の方々が３桁のNDCで会話をしていたのについていけず、途中で何度か何について話しているのかが分からなくなった。日常的にあまり接していない分野とはいえ、事前に勉強してから臨めばより多くのことが学べたかと思うと残念だ。他にも、出版社の特徴や、同区の他館との蔵書のバランスなど、長く勤務されている方しか分からない情報をもとに図書の受入を決めている場面もあり、今まで大学で学んできたことの他に、現場で身に付く知識があることを感じた。

もうひとつ印象に残っているのが、レファレンス・カウンターに立った時の出来事だ。私は実際に利用者の方から質問を受けた。質問の詳細を記すことはできないが、私はその質問を最初に聞いた時、比較的容易に回答となる資料を提示できると思った。ところが、資料を探すのに思いのほか時間がかかった。何故なら、同館が所蔵していない資料だったからだ。私が最初に容易に回答できるだろうと思った時に思い浮かべていたのは、使い慣れた大学図書館の蔵書だった。だが当然、大学図書館と公共図書館にある資料は異なる。結局、その質問に関しては、キーワードを変えて再検索し、区内の他館に資料があることが分かったので、その資料を取り寄せることにした。

すると、更なる質問を受けた。その質問に関しては同館の資料では対応できそうにないものだったので、どのように検索し、どこに行けば、資料に触れることができるかを紹介することにしようと思った。だが、ここで利用者がインターネットを全く使えない方だったことが判明する。途端に、私の中でいくつか浮かんでいた検索方法は紹介しても利用者の方には役立たない情報になってしまった。結局、かなり専門的な内容だったため国立国会図書館をすすめ、レファレンスは終了した。

これらの経験から、自分が無意識に自分に引き寄せてレファレンス・クエスチョンを捉えていることが分かった。質問そのものを明確にすることも大切だが、環境や利用者に合わせた回答の提示ができないと、利用者にとって役立つ回答とはならない。「自分ができることは利用者も当然できる」「あの資料なら絶対にあるはずだ」という思い込みを捨て、利用者や図書館についてもしっかりと把握しなければならない。

こうした実習での体験は、これまで学んだ知識と現場を紐付けることに多いに役立った。また、書架整理や図書の受入といった業務を通し、自分が知らなかった資料に出会える瞬間や、その機会をくれる図書館という場所が好きだということを、私は改めて感じた。司書課程を履修することや実習に参加することは、学部で定められた単位だけを取得して卒業することに比べたら、負担が大きいことは明らかだ。だが、その分たくさんの気付きを得られると思う。

おわりに

今、公共図書館は色々な企画をし、利用者の拡大を試みている。世田谷区立中央図書館では、文字活字文化の振興を目的とした試みとして、ピアノの即興演奏と朗読がコラボする「言葉と音楽が旅をする」というイベントが開催された。実習の中では、新たなイベントを企画し、利用者の拡大を図りたいという職員の方のお話もうかがった。また、委託や指定管理などの図書館経営に対する現場の方の率直な意見もうかがった。

少しの間ではあるが、現場の一部を体験し、そのような実際に働く方々の声を耳にすることは、現在議論がなされている図書館の経営やサービスについて、何らかの意見を持つきっかけとなるだろう。私は、実習をきっかけに公共図書館でのレファレンス質問の少なさや回答提示の難しさについて、解決策はないだろうかと考えるようになり、先日永田先生にお会いした際にうかがってみた。すると、レファレンスを事前予約制にしている国があること、

そうすればより高い質のレファレンス・サービスが提供できるのではないかということなど、他国の図書館や先生のお考えを知ることができた。

日程の関係で実習への参加を迷っている方も多くいるとは思うが、図書館について学んだ者として、実習に参加し現場を知って、問題を考える機会をぜひ生かしてほしいと思う。

最後になったが、授業を通し私に多くの気付きや関心を与えてくださった永田治樹先生、中村百合子先生をはじめ、お世話になった先生方、職員の方々にこの場を借りて感謝申し上げる。

---

1) 海老名市立中央図書館は、カルチュア・コンビニエンス・クラブ（CCC）と図書館流通センター（TRC）による共同事業体が運営に当たり、10 月初めにリニューアル・オープンした。CCC と TRC は関係を解消するとする報道（2015 年 10 月 27 日『毎日新聞』東京朝刊）もあったが、契約継続の方針を示した（同 31 日『毎日新聞』東京夕刊）。同時期には、愛知県小牧市で新図書館計画の賛否を問う住民投票が実施され、反対多数となった。その結果、同市は CCC とのアドバイザリー契約を解消することを発表した（同 21 日『毎日新聞』東京朝刊）。

2) 図書館の貸し出しによって本が売れなくなっているとして、大手出版社や作家らが一定期間新刊の貸出を行わないよう求める動きがある（2015 年 10 月 29 日『朝日新聞』朝刊）。